

私が入園したのは、昭和一八年八月一九日だったから、終戦の二年前の事になる。南方の島々にまで広がった戦争は、米英連合軍の攻撃によって、玉砕につぐ玉砕が相次いだ。

そうした戦況の中で竹槍の練習や防空訓練に、毎日のようにかりだされていた。学業など問題ではなく、ただ被服工場で軍服を縫ったり、ボタン付けをしたり奉仕が要請された。だから家においても満足な勉強は出来ず、教科書も、手擦れるほど開くこともなく、参考書も真新しいままであった。それを当然として受け入れ、戦争に協力を惜しまなかった。

日本は神国であり、いざという時には神風が吹くといわれて、戦争とは勝つことである、と子供の頃から思い込まされてきた。

しかし、発病によって療養所に否応無く入らなければならなくなったとき「一年か二年すれば回復して帰れる」という医師の言葉を信じて、しばらく戦争のことは忘れ勉強したいと思ひ、教科書、参考書類を全て持って来た。

いくら社会の外に置かれている療養所であっても、戦時下には変わりはなく、医師や職員の多くは応召し、團長と女医、そして一〇人程の看護婦がいるだけの治療体制であった。もちろん医薬品も、食料も全てが欠乏の一途をたどっていた。

入所当時は、父と母が月に二回ほど代わるがわるの面会に来てくれたが、空襲が激しくなっていくと、家の事情が変わったことよって月一回となり、終戦の年はそれも二カ月、三カ月に一回となっていた。

また園内でも戦勝と、武運長久を祈る日の丸の旗を担いで、丘の上の大島神社に参拝して、皇居を遥拝し、万歳を三唱して帰るのが毎朝の習わしとなっていた。壮年団、青年団は同じ丘に作られた監視所に常駐して、敵機の襲来を監視していたのか、落とされる機雷を監視していたのかは知らないけれど、昼夜を分かつたず詰めていた。婦人会でも二人一組の救護班を作り、空襲警報が鳴り出すと、深夜でも起きてモンペに身を包み、防空頭巾と救急箱を持って、自治会の詰め所の前に集まり、空襲が解除されるまで待機しているのであった。

あるとき、急に空襲警報が鳴り響き、あわてて身支度をして家の外まで出た時、すごい爆音で艦載機が頭上を過ぎ、低空飛行しては、ちょうど兜嶋と庵治の間を東に向かっていた漁船に集中砲火を浴びせていた。私は家の角に立ちすくんだまま、その成り行きを啞然と見つめていた。暫くして艦載機は飛び去り、漁船は後尾から煙を出しながら、兜嶋の向こうに消えて行った。真昼間の悪夢のような一瞬であった。

七月四日の高松市の空襲はすさまじいもので、爆音と共に焼夷弾が投下され、そして大島の上空辺りを旋回しては焼夷弾を降らす。焼夷弾が投下された町では、逃げ惑う人達が大勢いただろう。命を落とした人も少なくないであろう。大島も同じ爆撃下にある思いがした。ようやく白みかけた空を、艦載機なのか、整然と編隊を組んで北東の空に飛び去って行く機影を見ながら、一体制空権なんかどこにあるの、これでは敵機が思うように思うところを爆撃しても打つ手が残っていないのではないか、こんなことで戦争に勝てるのだろうかという疑問が心を突いて来た。

その日は集まると、男の人達は興奮して話し合った。誰もが初めて見た空襲である。丘に登って見た人、浜に出て見た人、防空壕に入るよういわれても入らずにいた人、言われるままに防空壕で、爆音と激しい地鳴りのような振動を聞きながら不安に耐えていた人、それぞれが体験したものであった。

しかし、私たちにはしなければならぬ作業が待っていた。夏季大洗濯といって、入園者全部の布団をほどこいで洗い、綿は何日も干し、洗った布団のガワに糊を付け、それに綿を入れてとじる。丁寧な仕事とはいえないけれど、石けんもないときに、灰の灰汁を取ったりしながら、一枚一枚布団を洗い直して行くのであった。暑い時期に私たち女性に当てられる作業の重労働といえるものであった。入園して間がない子供の様な私であっても許されることではなく、きちんと枚数が割り当てられてくる。一人では到底出来ない事であったが、寮の人達がみんな力を合わせて、一緒に仕事してもらえるので非常に助かった。家にいたときは、祖母や母の仕事であり、手伝うことすらしないで、勉強と遊びの毎日であった。そんな私でも療養所に入所するとそうもいかず、やるべ

きことはやらなければならないので、教えられるままに布団の作り方もじかたも出来るようになった。

もし戦争が起こらなかつたら、太平洋戦争を起こさなかつたら、十六年頃にはプロミンが日本にも入って来ているはずだった。その時であれば、後遺症は何一つ残さずに癒えていただろう。

戦争がもたらしたものに何一つ良いものは無かった。ただ芥のごとく思われていたハンセン病の患者に選挙権が回復したという、この一事が無ければ、私たちの立つ瀬は無かつたと思う。

戦争の悲惨さがいろいろと報道され、私たちの耳に入ってくるが、どんなことがあっても、戦争だけは決して起こしてはならない。戦争で訳も無く殺され、生活を根こそぎ失った人が、今なお多く居られる。

日本人だけの手で起こした戦だったのだろうか、それをよしとした相手がいたのでは無かつただろうか、そうしたある一部の人たちの考えで、多くの人々の人生が狂わされる。幸せが奪われる。戦争だけは絶対にはならない、と声を大きくして叫びたい。

私たち人間の諸々の思いも涙も深く吸い取って、輝いている青い炎天、八月十五日あの日の空のように。